中村敬宇の『同人社文学雑誌』

秋山勇造

1

中村敬宇（正直）は儒学者佐藤一齋門下の逸材で、安政二年、二四歳のとき学問所教授方になり、文久二年には異例の抜擢で三一歳の若さで儒官に列せられた。これは今日の大学教授とは比較にならない栄職で、定員二名の終身職であった。慶応三年（一八六六年）に幕府の命を受けて渡英したが、滞英中に維新の変に遭い、帰国後将軍職を辞した徳川慶喜のあとを追って静岡に赴き、徳川家が藩士の子弟の教育所として設立した学問所の教授となった。この職務の余暇に英国から持ち帰ったサミュエル・スマイルズの『Self-help』を訳して明治四年七月に出版したのが『西國立志編』である。この訳書が空前のベストセラーになり、維新の激変で生活の規範を失った人たちの生きる指針となったことは近代史上周知の事実であるが、驚嘆すべきことは、儒学者の最高位に上りつめていた彼が短日月のうちに、しかも攘夷の圧力の下でひそかに抜群の英語力を身につけていたことである。これに続いて『自由之理』（J・S・ミルの『On Liberty』。明治五年二月）、『西洋品行論』（S・スマイルズの『Character』。明治一

一年六月――一三年二月）などの訳書を公刊した。

維新後明治新政府は人材を集めることに急で、旧幕臣の中にも西洋の事情に通じた人材を求めていた。敬宇も明治五年に政府の招きに応じて上京し、大蔵省翻訳御用となったが、翌六年に主任の職を辞して同年二月に小石川区江戸川町に同人社と称する私塾を開いて子弟の教育をはじめた。この塾は開校当初から百名を越える生徒が集まり、開校した年の十一月には麹町平川町に分社を設けるほどの盛況ぶりで、最盛期には生徒数は数百に及び、福沢の慶応義塾と並ぶ私学の双璧となった。ここで彼は読本、文典、地理、歴史などの学科の授業を高弟にまかせ、もっぱら高等英語の訳読と作文の訂正に当った。また外国語の教授には外国人が適任であると考え、高給で雇い、住宅費まで支給したため、生徒の月謝一円では常に不足だったが、著述から得た金で不足分を補っていた。

このころ、アメリカから代理公使の任を終えて帰国した森有礼が、西洋の学会やクラブに倣った学者の集団の結成を提案し、西村茂樹、西　周、加藤弘之、福沢諭吉、中村敬宇らの賛同を得て、明治六年八月に約三〇人のメンバーから成る日本最初の学術結社「明六社」を設立し、翌七年にその機関誌『明六雑誌』を発行した。これが日本における学術雑誌の嚆矢で、敬宇もメンバーの一人として同誌に「西学一斑」などの論文を発表し、詩人のR・ブラウニング、R・バーンズ、それにベイコン、スペンサー、シェイクスピアなどの哲学者や文学者の所論を翻訳紹介して民衆の啓蒙につとめた。

一方、絶対主義的政権樹立を目指す明治政府は明治八年六月に讒謗律、新聞紙条例などの法令を公布して言論、出版の統制の強化をはかった。これらの条例にふれて逮捕、拘禁される言論人が続出し、特に政府批判の色合が強かった『評論新聞』などという新聞は半年間に一八人の記者が逮捕されたという（宮武外骨『明治奇聞』四）。明

六社の会員のほとんどは政府筋の人間（官吏）だったから、彼らはいっそう発言に慎重にならざるを得なくなり、遂に会員合議の上、明治八年一一月の第四三号をもって『明六雑誌』の発行停止が決定された。

2

『明六雑誌』が廃刊された翌年の明治九年七月に、敬宇は自らが主宰者となって中島雄を編集長として『同人社文学雑誌』を発行した。敬宇にすれば『明六雑誌』と縁が切れてかえってさばさばしたかもしれない。政府の役人の顔色を窺いながら物を書かなければならない時代が到来しつつあったからである。印刷売捌所は両国薬研堀の郵便報知新聞社だったが、大阪心斎橋道修町の支局を通して関西方面でも販売された。

この雑誌は創刊号の「題言」によれば、「社友中の詩歌文談、凡ソ学問文芸ニ関係スル古今中外一切ノ談論」を集め、「社友ヲシテ学問文芸ヲ上進セシメ言語文章ヲ修メ善クセシメル」ことを目的としており、半紙二つ折り、八葉一六頁前後の冊子で、発行は月一、二回または隔月と不定期だったが、四六号（明治一四年二月一〇日）から用紙を西洋紙に変え、頁数も二二頁にふやし、発行も月二回になった。毎月一、二回社友が会合して朗読や演説を行なったが、そのときの原稿と交友から集めた文章や詩歌の原稿を一緒にしたもので、見た目には小型だが、内容は歴史、伝記、学術、政治、宗教、哲学、詩歌など多岐にわたる一種の文化雑誌である。

雑誌の題名に文学の文字が使われたのは日本ではこれが最初だが、当時の「文学」という語の意味は現在使われている意味と大分違っており、この雑誌の内容をみるとその違いがよくわかる。蛯原八郎氏によれば、文学

(literature) という言葉が現在の意味で使われだしたのは、おそらく明治四年にドイツ人ロブシャイト著井上哲次郎訳の『英華辞典』が出てからで、この辞典ではじめてliteratureが文学、novelが小説と訳されたのだという(『明治文学雑記』ゆまに書房　平成六年一〇月)。

ただし、そのときから現在の意味で使われだしたわけではなく、少なくとも明治一〇年以前は文学とは学問(サイエンス)のことであり、小説とは小論、巷説の類をさしていたのである。

『明六雑誌』が実学的で、啓蒙家による解説色が濃かったのに較べると、この雑誌は主宰者敬宇の人柄もあって、文芸的、趣味的要素が濃厚である。

おもな執筆者は中村敬宇、中島雄、安藤勝任、信夫怒軒、井上哲次郎らだが、津田仙、西村茂樹、栗本鋤雲、副島種臣などの名前も散見される。各号の表紙の見返しには、西洋の諺や賢者の箴言に対訳をつけた句が掲げられ、

no sweat no sweet.

汗ヲ出サヽレバ、甘キモノヲ得ズ

Better go to bed supperless than rise in debt.

借債ヲ生ゼシヨリハ、寧晩食ヲ喫セズシテ、睡ニ就クベシ

Poverty shall come upon the idller, as one that travelleth, and want as an armed man.

貧乏ノ至ルハ旅客ヨリモ速カニ武士ヨリモ迅シ

右所羅門(ソロモン)ノ箴言ニ出ヅ

というように、西洋の箴言によって、清新な理想を読者に伝えるとともに、処世の術も教えている。またシェイ

クスピアやミルトンの詩の翻訳（吾妻兵治、明治一二年八月）、トマス・グレイの詩の訳（末松謙澄によるグレイの「田舎の墓地にて詠める挽歌」の漢訳「塋上感懐」明治一四年一二月）、リフレイン形式を用いた井上哲次郎の漢詩（明治一四年五月）などのほか、言文一致論（和田文遺「書語口語同ジキヲ欲スルノ説」明治九年一二月）やキリスト教弁護論（東条世三「教授論」明治一一年五月）などもみられる。創刊された明治九年から一〇年代の半ばまでこの雑誌が西洋の知識を民衆に与えた功績は小さくなかったが、明治一六年五月の九二号を最後に廃刊されている。同人社の衰退に伴ったものと思われる。

3

敬宇はその名前のとおり正直な人で、人と争ったことがなく、人々から江戸川の聖人と呼ばれた。彼は寡欲で金銭に淡白で、その点理財にたけた功利主義者の福沢とは対照的で、同人社が長続きしなかったのも金銭に無頓着な彼の性格によるところが大きかったといわれている。

福沢に代表されるように、明治開化期の啓蒙家の多くが物質面を重視したのに対して、敬宇は西洋文化を受け入れることに吝かではなかったが、一貫して精神的、道徳的側面を重視した人で、その点明六社同人の中では異色の存在であったといえる。彼はまた自身が設立した同人社でも女子に門戸を開放し（同人社を設立した翌年の明治一二年に分校として「同人社女学校」を開設した）、東京女子師範学校の設立に当っても請われて五年間教鞭をとるなど、女子教育の先駆者として日本の教育史に特筆されるべき業績を残した。明治女学校の経営者で、『女学雑誌』

の主宰者として明治女性の啓蒙に貢献した巌本善治も青年時代に兵庫から上京して敬宇の同人社で学んだのである。

彼はまた、明治九年に岸田吟香、津田仙、吉川正雄らと訓盲院を設立して盲人教育に取組んだ。これがのちの東京盲学校と東京聾唖学校の基になるのだが、この事業も営利売名とは無関係に、純粋に盲人への同情から始められたことは、岸田吟香が『東京日日新聞』（明治八年八月八日）に書いたつぎの一文を見ればわかる。

「今年五月の頃より始めて中村正直、吉川正雄、津田仙およびこの岸田吟香、外国人にはプロフェッソル・ボルシャルド、ドクトル・ホールド、ミストル・バルソンの諸氏が決して少しも自分の利欲の為でなく、真に慈善の志を以て、毎月数次の会議を成して、盲人に文字を読ませ仕事を教ゆる所を取り立てんと集議を尽したるに、漸やくその教育の仕方と永続の目的も立て、凸字の書物はすでにアメリカへ注文し、猶また日本にても板行する工夫も調ひたれば、然るべき地所を貰ひ受けて訓盲所を取り立てんと、此ごろ東京府へ願ひ出たり。素より山師どものする事と違ひ、更に一点の私慾をも挾まぬ願ひなれば、必らず遠からずして許可あるべし。嗚呼我が兄弟中の尤も憐むべき哀しむべき盲人等の心目をして此文明聖代の光輝を見ることを得せしむるも亦近きに在んとす。有難きことならずや」

これが日本におけるこの分野の福祉事業の嚆矢になったのだが、当時は、「目あきさえ字が読めない者が多いのに、その教育をなおざりにして、盲人を教育するというのは緩急を誤っている」と非難する人が少なくなかったし、役所の側にも積極的な協力姿勢がなかったために実現は大分難渋したが、「此訓盲院は盲人をして其善徳才智を発達せしめ及び之れに工芸技術を授け自営自立の人たらしめんことを冀望し吾輩会友の共立せんとする所なり」と

「訓盲院設立の目的」にあるように、障害者の不幸を憐み、その障害に代えて彼らの精神の健全と自立を図ろうとする真の慈愛から出たもので、有志一同は世間の批判にめげず、誠心誠意事に当り、日本の盲人・聾唖者教育の基礎を築いたのである。

敬宇は生来壮健な人ではなかったが、明治二四年六月に急に発病し、同月七日に六〇歳で没した。葬儀は自宅で神式で行われ、谷中の墓地に葬られた。葬儀には各省の諸大臣、貴衆両院議員、外国公使のほか一般会葬者も二千人以上列席した。

馬車、人力車で通路も塞がるほどだったが、その中を盲人団体東向会の会員七、八〇名が頭をたれて柩にしたがう姿が参列者の涙を誘ったという。

しかし敬宇の葬儀にはそれがもっともふさわしい光景であったように思われる。